

近世初期の自然災害記録媒体としての 『当代記』の特性分析

静岡大学教育学部* 田中敏貴**・小山真人

"Todaiki" as a Record Medium of Natural Disasters
during the late 16th-early 17th Century in Japan.

Toshitaka TANAKA and Masato KOYAMA
Faculty of Education, Shizuoka University
836 Oya, Shizuoka 422-8529, Japan

"Todaiki" is a famous chronicle describing the Early Modern age (mainly during the late 16th-early 17th century) of Japanese society. The chronicle contains descriptions of earthquakes and volcanic eruptions during this period. The name, background, and residence of the author of the chronicle, however, have not been identified yet. We picked up all the descriptions about natural phenomena from the chronicle and clarified their temporal and spatial distributions. The abrupt increase of descriptions of natural phenomena at about A.D.1600 suggests that the chronicle has been written since this time. The distribution of localities, which are referred to in the chronicle, suggests that the residence of the author is located in the northern inland part of Mie Prefecture.

§ 1. はじめに

小山 (1999) は、地震・噴火史料の記述解釈にあたっては、記録媒体である個々の史料自体が、自然現象に対してどのような記録特性をもっていたかを知ることの重要性を論じた。また、そのことの実例として、生島・小山 (1999) は、日本古代の基本史料である六国史に記された総情報量 (および、その中に含まれる自然現象にかんする情報量) の時間変遷を詳細に分析し、六国史時代の中でも時期や編者によって情報量や記録特性が大幅に変化することを明らかにした。その結果、六国史中にみられる地震頻度の時間変化は、実際の地震活動度の変化ではなく、地震という現象に対する記録特性 (おそらく編集方針) の変化を反映したみかけ上のものである可能性がたつよいことが明らかになった。

『当代記』は、主として安土桃山時代から江戸時代初期にかけての社会・政治の状

況を編年的に記した書物であり、他の史料では得られない事件記録 (数多くの自然現象をふくむ) が多く、史料地震・火山学にとっても重要な史料である。著者は不明であるが、用語は当時のものであり、同時期の成立である事に疑問はないとされている (たとえば、吉川弘文館刊「国史大辞典」第10巻p.146-147)。しかし、個々の自然現象記述の内容については疑問の残るものもある (小山, 1996)。

本研究は、『当代記』からすべての自然現象・災害に関する記述を拾い出してデータベース化し、それにもとづいて自然現象に対する『当代記』の記録特性の分析を試みた。分析対象としてもちいたのは、史籍雑纂本 (続群書類従完成会1995年復刊) である。

§ 2. 結果

2-1. 史料全体の総記述量

『当代記』全体の総記述量を1年あたりのページ数としてまとめると、1532年～

*〒422-8529 静岡市大谷836
mkoyama@ed.shizuoka.ac.jp

**現所属：四日市市立保々小学校

1604年の間はほぼ一様（1年あたり平均2.1ページ）であり、それ以降は記録量が増え1年あたり6～33ページとなっている（ただし、記録最終年の1615年を除く。図1）。

2-2. 自然現象・災害の記述量

1532年から1615年にわたる84年間の事

件を記述する『当代記』だが、1570年までは自然現象・災害に関する記述が全くない（図2）。1594年から毎年連続して自然に関する記述がみられるようになり、1600年前後から記述量がしだいに増え、1604年以降は毎年20件以上（23～95件）が記録されている（ただし、記録最終年の1615年を除く）。

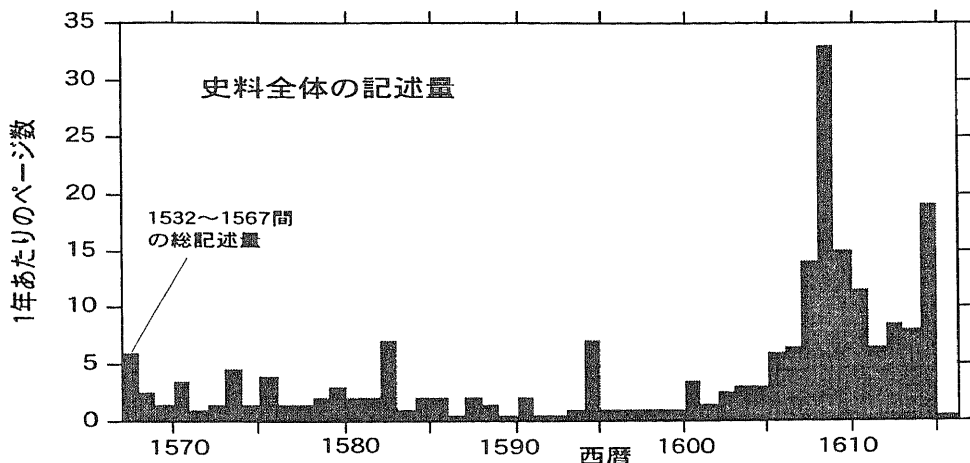


図1 『当代記』全体の記述量の時間変化. 1年あたりのページ数であらわした（ただし、左端のバーのみ1532～1567年の36年間の総ページ数）。

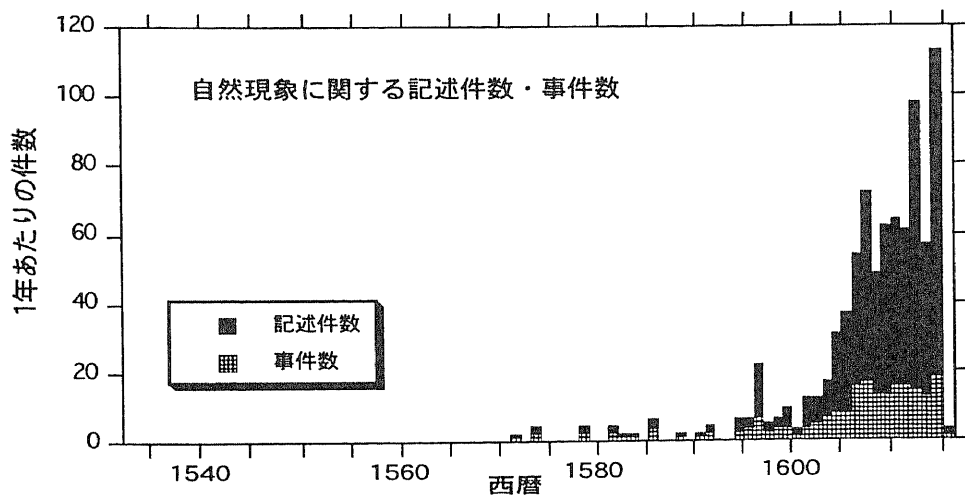


図2 『当代記』中の自然現象・災害に関する記述件数・事件数の時間変化. ここで、「事件数」は、同一事件に対する複数記述をまとめて1件と数えたものであり、事件の実数をあらわす。

自然現象・災害に関するすべての記述を種類別にまとめると、雨に関する記述が圧倒的に多く（229件）、ついで風（68件）、雪（38件）、地震・火山・鳴動（24件）、雷（22件）、ひょう・あられ・みぞれ・時雨（13件）、彗星・日蝕・

月蝕（10件）、その他（大霧・大霜）（3件）という順である（図3）。

このうち、地震・火山に関する記述は、すべて1585年以降に集中しており、しかも複数件数が記述されている年は1596年以降に限られている（図4、表1～2）。

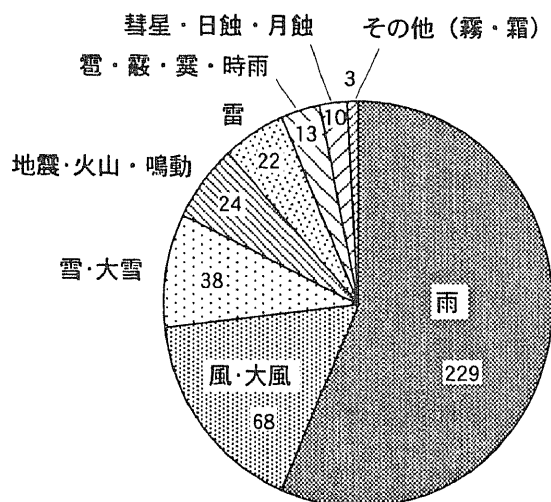


図3 自然現象・災害記述の種類別件数.

2-3. 地域別にみた自然現象・災害記述

自然現象・災害に関する記述は、東海地方、近畿地方、関東地方、浅間山、その他の地方に関する記述、そして地域不明の記述に大別することができる（図5）。中でも「八月六日大雨，七日朝大水」「十一月十九日，申刻より終夜大雪」等のように、事件の起こった場所を特定しない記述が圧倒的に多く413件，続いて東海72件，近畿52件，関東44件，浅間山10件の順となっている。

国別にみると，近畿地方では京都が位置する山城国の情報が29件と多いほかは8～16件の範囲にあり，地方の中でさほどの偏りはない（図6a）。関東地方の記述には国を特定したものは少なく（いずれの国も5件以内），多くが「この日，関東に～」と

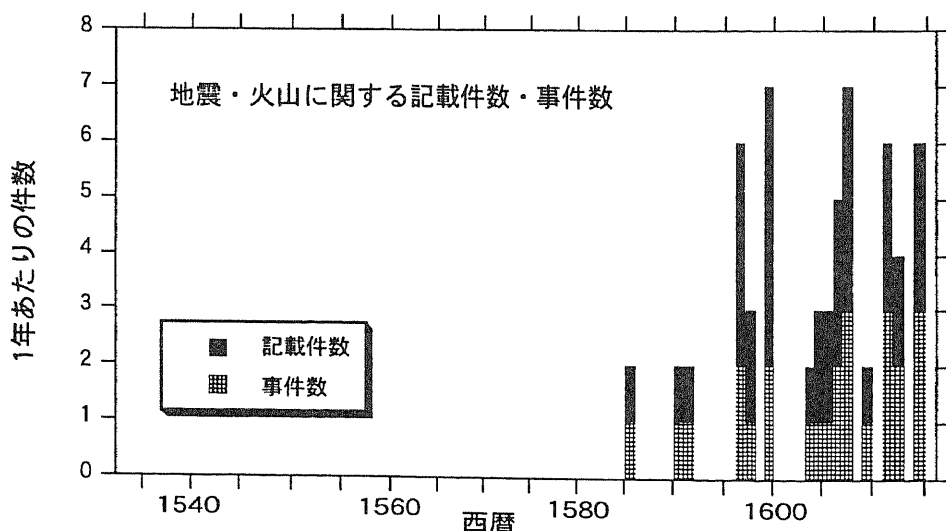


図4 地震・火山に関する記述件数・事件数の時間変化.

和暦年	時期	西暦	種類	関連する記述
天正十八	春	1590	噴火	なし
天正十九	春	1591	噴火	なし
慶長元	七月	1596	噴火	信濃・近江・京都・伏見に降灰
慶長二	三月	1597	噴火	西上野～常陸に降石
慶長三	四月	1598	事件	四月八日浅間山に参詣衆八百人程焼死
慶長四	二月二十日	1599年3月16日	鳴動	なし
慶長四	十一～十二月	1599～1600	鳴動	十一月二十八日～十二月十日小幡に降灰
慶長八	十二月三日	1604年1月4日	鳴動	此響三河美濃へ聞こえる
慶長十～十一	十一～翌年正月	1605～1606	噴火	なし
慶長十四	春	1609	噴火	なし

表1 火山に関する記述の時期と概要. すべての浅間山関連の記述である. このほか慶長十五年四月九日(1610年5月31日)に三川国(三河国か)の山中日近という所に石が降ったとの記述があるが, 火山とは無関係と思われる.

和暦年	和暦月日	西暦	関連する記述
天正十三	十一月二十九日	1586年1月18日	子刻大地震、北国、尾州長島に被害 関東は地震なし
慶長元	閏七月十二日	1596年9月4日	子刻上方大地震 京都、伏見、大坂、堺に被害
慶長九	十二月十六日	1605年2月3日	戌刻地震、東舞阪に大波くる。人多死
慶長十一	六月一日 六月三日	1606年7月5日 1606年7月7日	巳刻終地震、同申刻終又地震 辰刻少地震
慶長十二	一月六日 二月六日 六月十三日	1607年2月2日 1607年3月3日 1607年8月5日	江戸大地震、七日より三日打ちつづく 夜半江戸大地震、上方地震なし 此日、駿府地震
慶長十六	二月二十二日 八月二十一日 十月三日	1611年4月5日 1611年9月27日 1611年11月7日	亥刻地震 奥州会津で大地震 戌刻少地震
慶長十七	二月二十日 十一月十三日	1612年3月22日 1613年1月3日	夜寅刻地震 未刻地震
慶長十九	八月二十五日 九月六日 十月二十五日	1614年9月28日 1614年10月9日 1614年11月26日	丑刻地震 駿府丑刻地震 午刻大地震

表2 地震に関する記述の時期と概要.

いう形を取っている(図6b)。

東海地方の記述は、地名や人物の動き等がもっとも詳しく、総量としても地域不特定の記述について多い(図6c)。しかし、美濃・尾張・三河・伊勢・遠江・駿河の各国の記述が10～23件の範囲にあるのに対し、安濃津と伊賀に関する記述の少なさ(それぞれ0件と1件)が目立つ(なお、こ

こでは、東海道の通過する伊勢国北部を、便宜上「安濃津(あのと)」として伊勢国と別区分した)。

さらに、東海・近畿地方の記述の中で登場する地名を拾い出して分布図にすると、安濃津・伊賀の情報欠落が空間的に不自然にみえる(図7)。

§ 3. 考察

3-1. 『当代記』はいつ書かれたのか？

自然現象・災害記述は、1600年頃を境とした記述量増加（図2）にともない、大きな事件前後の細かな気象情報も含めて詳細に書かれるようになっていく。このことから、1600年頃から『当代記』は執筆され始めた（あるいは執筆材料としての同時代データが収集された）のではないかと考えられる。となれば、『当代記』が地震・噴火にかんする同時代史料としての信頼性を十分もちうるのは、1600年を過ぎた頃の記述からであると言えるだろう。

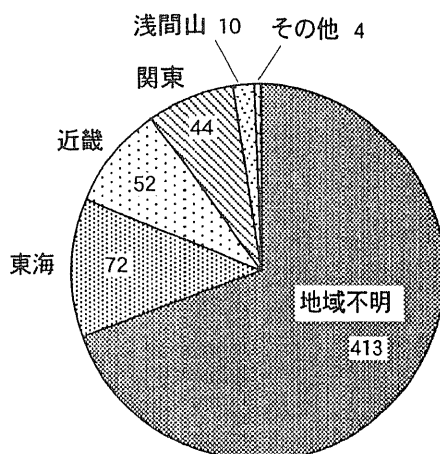


図5 自然現象・災害記述の地域別件数。

3-2. 『当代記』はどこで書かれたのか？

先に述べた地域不特定記述の圧倒的な豊

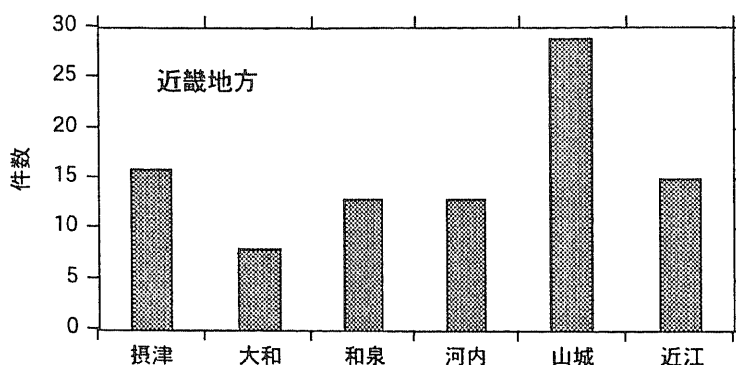


図6a 近畿地方の地域別自然現象・災害件数

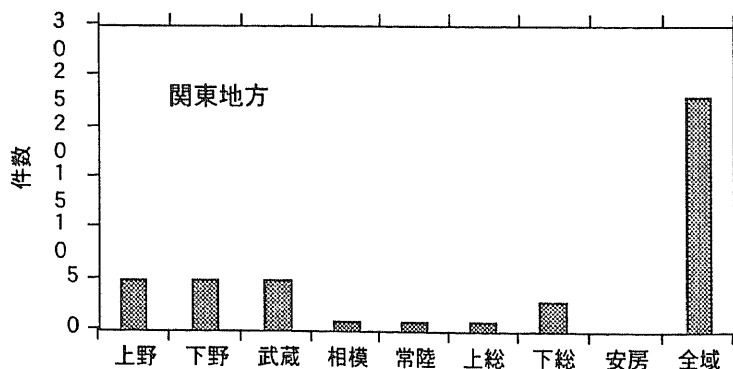


図6b 関東地方の地域別自然現象・災害件数

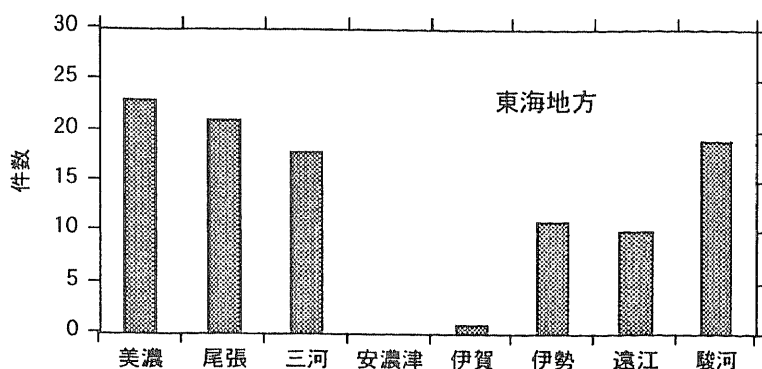


図6c 東海地方の地域別自然現象・災害件数



図7 『当代記』中の自然現象・災害記事に登場する東海・近畿地方の地名分布。●は地名の位置（数字は登場する回数、1回の場合は省略した）。また、国名の後の数字は「○○国にこれこれの自然現象・災害があった」という記述の登場回数をあらわす。ただし、東海道の通る伊勢国北部を「安濃津」として別区分した。

富さ、および『当代記』が日記風書かれていることから考えて、これらの地域不特定記述は、『当代記』筆者の居住地において生じた自然現象・災害の記録ではないかと考えられる。たとえば、静岡市在住の人物が身近な地域の気象を書くときに、「今日の静岡市は雨」とわざわざ書くことは考えにくいからである。

さらに、上述したように最も記述件数が

多くかつ詳しい東海地方において、安濃津と伊賀における記述の少なさは特異である（図6c、図7）。とくに安濃津は、主要街道である東海道が通過しているにもかかわらず、地名登場の少なさが際だっている。この安濃津（もしくは伊賀）こそが、『当代記』筆者の居住地だったのではないだろうか。

なお、『当代記』には1596年の伏見桃

山地震について京都・伏見・大坂・堺に被害があったことが記述されているが、「地域不特定」の地震被害記述はない。また、1605年の慶長南海トラフ地震津波については、舞阪（現在の静岡県浜名郡舞阪町）、伊勢国の浦々、関東、紀伊、四国などに津波被害があったことが記されているが、やはり「地域不特定」の津波被害記述が見あたらない。

以上のことは、『当代記』の筆者の居住地が、これらの地震・津波災害の被災地域からやや離れた内陸部にあったと考えると説明可能である。よって、筆者の居住地を安濃津の内陸部（または伊賀）と考えるのが自然である。

つまり、『当代記』は、17世初頭の伊勢湾周辺地域で起きた自然現象・災害を実体

験談あるいはそれに準じるものとしてよく伝える史料であり、それ以外の地方で起きた事件や16世紀の事件については、主に伝聞や他文献にもとづいて書かれたと判断してよいだろう。

文 献

- 小山真人，1996，歴史記録と火山学，UP，東大出版会，no.281，24-29.
小山真人，1999，日本の史料地震学研究の問題点と展望一次世代の地震史研究に向けて一，地学雑誌，108，346-369.
生島佳代子・小山真人，1999，飛鳥～平安時代前期の自然災害記録媒体としての六国史の解析一概要および月別情報量一覧一，歴史地震，15，1-23.